

# 福井震災体験記

“一刻も早く地震電報を！”

☆☆ 福井測候所（現気象台） 宮前経吉さんの体験、見聞記 ☆☆

（原文の専門用語その他文章を分かりやすく変更しました。）

◎ 昭和23年6月28日夕刻：帰宅途中の橋の上で、グラグラと大きく水平動を感じた。「どこかで大地震がおきたな！」と思いながら腕時計をすぐ見た。30秒13分17時！（夏時間：当時は1時間早めていたので現在の16時13分30秒）。しかと脳裏に時刻をきざみ続けたが3～4歩で更に大きな震動がきて路上に倒れた。起き上がって周囲を見渡すと方々から土ぼこりが舞い上がり、電線は垂れ下がってゆれている。川端の大きな建物がペシャンコにつぶれている。川面には油が浮いている。くもの子を散らしたように人々は走る。おそらく隣の銭湯から逃げ出したであろう裸体の母子が、このつぶれた建物のひさしの下敷きになって「助けて！助けてちょうだい！」と絶叫していた。

急ぐ身だが、見捨てて走り去るわけにはゆかない。ひさしを持ち上げたらスルリと抜け出して一目散に逃げていった。もう30cm建物の中に入っていたら即死していたであろう。

◎ わが家の近くまで走って行ったら、生後一週間目の長女を抱いて妻が隣家の畑に裸足で立っていた。義母も義妹も裸足のままだった。「皆無事だな！」と声をかけ、きびすを返して再び測候所へ走り戻った。

◎ 引き返してみると、測候所では観測・予報当番者2人が放心状態で、地鳴りする北方をただ茫然と眺めていた。

転倒したであろう観測機器の修復、余震の体感観測、地震電報の発信など全く気付いていない。

「余震の観測をせんか！！」と一喝すれば、電気にかかったように我に返り、野帳（観測用ノートのこと）を取りに壊れた観測・予報作業室に入って行った。

倒壊した福井測候所



◎ 百葉箱内の倒れた自記観測機器を直し、風向、風速計の異常の有無点検のため、余震のな

かをらせん階段を昇っていると、「危ない！気をつけろ！」と、山中所長の声が背を打つ。柱に設置されていた気圧計は柱ごと傾いたが、たまたま残業していた測候所員が、柱から取り外して観測できるように設置し直している最中であった。

- ◎ 東京の中央气象台（今の気象庁本庁）へ地震電報打電のため、測候所裏の川に入ったり、道路上に倒れた家の屋根の上を通ったりして電報局へ赴く。

鉄道線路を西に渡った駅の南通りでは、倒れた家からチョロチョロと火が出ていた。

誰もこの火を消そうとしない。第一、人がまったく付近にいない。水道の栓をひねったが水はまったく出ないし、近くに防火用水もない。

（火元に隣接した家もないし大したことにはなるまい、自分は今一刻も早く打電しなければならない。火は誰かが消してくれるだろう）

やっとたどり着いた電報局。なのに、電信

機は見事に列をなして全部倒れているではないか。局員が一人つつ立っているだけだった。

「測候所だが地震電報を」、「全部不通です」

さらばと非常無線のある県庁へ行ったが、電池が倒れたので無線通信は不能とのこと。放送局へ廻ってみたがここでも通信不能という。

念のためもう一度電報局へ戻ったらやっと今金沢線が通じたところだと先ほどの局員が言う。

体感観測だが、発震時を腕時計でみておったのと（この腕時計は正午のラジオの時間にあわせてあった）地震電報型式を小さな紙片に書いたものを絶えず携行していたので、打電し、庁舎、宿舍、市内の被害状況を平文で追加した。（後で聞いたことだが、中央气象台地震課では震央をこの電報で越前平野として発表できたとのこと）

- ◎ 測候所へ帰り、打電したことを山中所長に報告、今夜の勤務担当者を手配し、職員とその家族の安否確認を手配する。

- ◎ 日暮れとともに火の手は各方面から上がり火の勢いは猛烈を極めた。

道路上に民家が倒壊し、方々に地割れが生じたから、消防車の活動は全く不可能で、ただ燃えるに任せるのみである。

水道管の破裂で消防車がきたとしても水は出ない。

国鉄職員が建物の倒壊で、右腕が桁の下敷きとなり、同僚が助けようとしても引っぱり出



せない。そのうち火災が延焼してきたのでやむなく右腕を切断して助け出したとのこと。

当時、福井測候所へ出入りしていた文具店の外務員は、倒壊した店の桁の下敷きとなった。引いても押しても救出できないうちに火災が次第に延焼してきて、店主の合掌・落涙の中で焼死した。

全市が被災しているから短時間内には他人は誰も救助にきてはくれない。災害救助隊本部が設けられ、救助活動が本格的に始まるのは、少なくとも4～5時間位後であるが、交通が途絶状態なため、十分な活動はすぐには期待できない。

- ◎ 「今夜半にもっと大きな地震がある」とのデマが町内会長から各戸に伝えられ、こともあろうに測候所まで知らせてきた。怒りは頂点に達し、疲れた足を引きずって災害本部にこのデマの打ち消し方を依頼に赴いたのは22時。知事以下県首脳が労をねぎらってくれる。
- ◎ 測候所の庁舎、宿舎は倒壊し頻繁な余震が少なくとも一昼夜以上続くから、家が半壊でも戸外で寝なくてはならない。
- ◎ 福井地震時には戦災にあって地震計がなかった。あったとしても庁舎の倒壊で地震計もつぶされ、P波、S波、最大振幅など地震波形の諸元を読みとることは不可能だっただろう。
- ◎ 夕食もとらずに帰宅したのは夜半。家族は半壊の家から畳を3枚持ち出して、戸外で2分おき位の余震におびえながら、身体を横にしていた。

遅い帰宅に女ばかりの不安もあって義母の怨めしそうなまなざし。すまぬすまぬと心にわびるが、防災を任務とする者には、家族に辛抱して貰わなければならぬこともあるのだと自分にいいかせる。

- ◎ 叔父のU家へ養女にっていた妻の妹が、4ヶ月の赤子を残して家の下敷きになったという。休む暇もなく深夜U家に赴く。

「どの辺で下敷きになったのか」

「座敷のあたりだろうが、とても掘り出せるものではない」

「まだ望みがあるかもしれぬ」

停電の暗夜に素手で瓦をめくろうとしても容易にめくれるものではない。暫時にして諦めざるを得なかった。

足羽川も九頭竜川も橋はみな落ち、泳いで翌日出勤した職員もいた。

- ◎ 測候所職員のY夫婦は震災時自宅2階にいたが、地震と共にY君は階段をとび下りて戸外



に逃れたが、続いて飛び降りた奥さんは、倒壊家屋の下敷きとなって死亡した。

階下が潰れて2階がそのまま上に乗っている家が市内にたくさんあった。

◎ 九頭竜川の堤防に亀裂が生じ、地震後約1ヶ月の梅雨明け豪雨で堤防が決壊。福井市内は無残にも大水害の追い打ちを受けた。

◎ 中央气象台から派遣されたAさんが倒壊材で小さな仮の事務所兼寝所を建てて下さった。

県外の報道機関、大学、地震研究所、陸地測量部、地磁気観測所、移動地震観測班、近隣気象官署、管区气象台等から取材、調査、観測、見舞、応援に来ていただいたが、旅館が無い。

河角博士をはじめ、著名な地震学者、報道員、管区並びに近隣気象官署職員など、淡いろうそくの灯火のもと、この狭い寝所で語らい蚊を追いながら幾夜寝られたことか。

◎ 食糧、毛布などは救助隊からいただき、役所で炊事をする事となる。

出勤すれば数多くの来客の対応、食事・寝所の世話、震災踏査班の編成等でまたたく間に時間がすぎ、毎日の帰宅は24時過ぎとなる。

◎ 家族を寝かせる僅か2坪ほどのバラックを建てるのに2週間もかかった。幸い倒れなかった隣家が、その間泊めて下さったのは生涯忘れられない恩義である。

(東管技術ニュース No.17 FEB.1971 より：敦賀測候所長時代に書く)

